

庶民の中の大平先生

合田 増太郎

大平先生がお生まれになった地元町として、讃岐の西端、愛媛との県境にある人口一万余の小さな豊浜町が、昭和五十三年十二月、先生が党総裁、総理に就任されるに及んで、一挙に日本一の榮譽に輝くことになりました。それから一年半、昭和五十五年六月十二日、豊浜町民は一転して奈落の底に突き落されたような日を迎えました。大平先生に私達がお目にかかったつど必ずぼつりと洩らされる言葉の中に、これは忘れてはいけない、しっかりと心に刻みこんでおかなければいけないといった訓えをうけました。凡庸の私は、その多くを忘れましたが、総理就任後の昭和五十四年一月末頃、私と当町の議員一同でお慶びのため瀬田の私邸に早朝おじゃまいたしました折のお言葉だけは忘れることはできません。

故郷の模様が話題の中心になりましたが、そのうち議員の誰かが、「先生、自民党も派閥関係がなかなかむつかしいですなあ。先日テレビを見てみると大臣の　先生が、辞表を出さんと申して意気まいてるところが映っておりましたが、毎日が気骨の折れることで、お疲れですなあ」と申しあげたところ、先生はいつものようにうつむき加減で、それでいて、一瞬少し厳しい表情をされましたので、私は愉快的な郷土の話で寛いでいられたのに、これはまずいことになったなと思ひ、お質ねした議員と先生のお顔の中間で独り気を揉んでいると、やがて先生は微笑を浮かべ、静かな低いお声で「ううん、世の中のことには、すべて少し、うすら寒いくらいが、いいんじゃないか、あまりぬくぬくやっていると、かえって風邪を引き易い」と違つか、町長、君だつてそうだよ」

と。よく考えて見ますと、この言葉の中には、平凡なようで非常に大きな普遍的な訓えがあり、偉大な大平先生のお人柄が、そのまま偲ばれます。私は自分の小さな日常に、また町政の上で事あることに、この言葉を改めて噛みしめております。

また、三木内閣の大蔵大臣であられた頃でしたから、昭和五十一年十月頃のある日、帰郷され、非常に多忙な日程の中を特に一時間割かれて、当町の小学校時代の同級生（二十八人くらいと思う）と夕刻六時頃、食事を共にせられました。私も町長ということで特に招かれ、同席の光栄に浴しました。田舎のこととて現職大臣がおいでるところではありませんでしたが、牛肉のすき焼きをつつかれてのことでした。昔話にも先生は「おおか元気が」「いつも世話になってるなあ」と本当に上下のない、あけすけの、おもしろい話が飛び出しておりましたが、酔いの廻るにつれて、誰かが、「あんたが余り偉いもんになったので、近寄れんようになってきよる」といいましたところ、先生は大笑いしながら、「うん、自分でも思わん偉いもんになって、えろつ（苦しい）ていかんが、早うところ（故郷）へ帰って昔のように皆の仲間入りがしたい」といわれました。

いつまでも竹馬の友と故郷を忘れない、人間大平先生を見た思いでした。末席に坐っている人達にも、「君、こつちへこいよ」と手招きせられるなど、いちいち細かな面にも気を配られ、昭和二十七年十月衆議院議員として初当選以来、手弁当でお互いに選挙戦を闘われた話などで予定の時間が大分超過し、警備のため外部にいた警察官から「まだでしょうか」と尋ねられるほどでした。私には忘れられない想い出の一夜でありました。

総理就任後初のお国入りをせられた昭和五十四年七月七日、香川が大平フイバーと呼ばれる大歓迎の歓声に沸いた所以も、このような大平先生の永年の変わらぬまじめなお人柄がさせたのだと、いまさらのように先生をお偲びしています。

（香川県三豊郡豊浜町長）